

書 評

Michael Moerman. *Agricultural Change and Peasant Choice in a Thai Village*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1968. xii+227 pp.

飯 島 茂*・前 田 成 文**

著 者 について

1968年の初秋、日本で国際人類学・民族学会が開催された。その時、京都の国際会議場で開かれた東南アジア関係の分科会に出席していると、ある報告の討論に黒い髪とあごひげの若いアメリカ人学者が立った。彼の早口の上に、ウィットとユーモアにあふれた鋭い発言はきわめて印象的であった。あとで彼が Michael Moerman であることを知り、一人うなずいたのであった。それというのは2~3年前に Moerman の “Who are the Lue?”¹⁾すなわち自分の調査研究をした民族集団がなにであったのかと言う、シャープではあるがきわめてユーモラスな論文のことが脳裏にのみ返ってきたからである。その後の Moerman との交際を通して、彼が機智に満ちあふれているという第一印象は変わっていないし、本書の随処にそれが良く現われている。

Moerman は1964年にユール大学で Ph. D. を取り、現在カリフォルニア大学ロスアンジェルス分校で助教授をして、人類学を講じている新進の文化人類学者である。彼は比較社会や経済が専門分野であると言われている。

* 京都大学農学部

** 京都大学東南アジア研究センター

- 1) Michael Moerman, “Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who are the Lue?” *American Anthropologist*, 67: 1215-1230, 1965.

本書の位置付け²⁾

この本は1960年1月から61年4月の15カ月間と、1965年の1カ月間にわたるタイ国北部チェンライ県チェンカム地区の Ban Ping というタイ・ルー族 (the Thai-Lue) の村落調査 (妻同伴) によって書かれたものである。

タイ・ルー族は本来雲南省からラオスにかけて分布しているタイ語族の一種で、文化的にはビルマのシャン族やタイ国の北タイ族と類似の集団に属している。しかしながら、タイ・ルー族はシャン族や北タイ族のように“完全な”農民的要素を持っている民族集団とはことなり、農民的文化の底流に部族的文化の香りをどこかに漂よわせている印象を受ける。

ところで、これまで東南アジアにおける村落調査を基礎とするいくつかの研究が出版されてきた。たとえば本書が扱っているタイ国を例にとると一般的に扱っている de Young³⁾を除くと、Kaufman の Bangkhua⁴⁾, Kingshill の Ku Daeng⁵⁾, Sharp の Bang Chan⁶⁾,

- 2) 図書紹介として本岡武による『東南アジア研究』6巻2号 (1968) pp. 463-464 参照。

- 3) John E. de Young, *Village Life in Modern Thailand*, University of California Press, 1958.

- 4) H.K. Kaufman, *Bangkhua: A Community Study in Thailand*, New York, 1960.

- 5) Konrad Kingshill, *Ku Daeng-the Red Tomb: A Village Study in Northern Thailand*, Chiang Mai, 1960.

- 6) L. Sharp, L. Hanks, et al., *Siamese Rice Village: A Preliminary Study of Bang Chan 1948-1949*, Bangkok, 1953.

Frazer の *Rusembilan*⁷⁾ など、とくに量的にみると、戦後のアメリカ人学者による研究成果には目ざましいものがある。⁸⁾ その限りにおいては、彼らが東南アジアの地域研究の中核的な分野を学界で認知させたという役割は十分に評価されてよかるう。

しかしながら、上記の出版物の質的な評価になると、いささか問題があらうと思う。すなわち、それらの本とイギリス系の学者の Raymond Firth の *Malay Fishermen* とか、すこし系列が違うが Edmund R. Leach の *Political Systems of Highland Burma* などと比較すると、方法論的にはこれらは1日の長があると認めざるを得なかった。だがそのような評価も本書を手にするによって、かなり変えなければならなくなった。すなわち、本書は1950年代から約20年にわたるアメリカ学派の成長を物語るものとして、きわめて感銘を受けるのである。換言すると、本書はこれまでのタイ国における村落調査を基礎とした仕事のなかで、はじめて社会科学的な研究と呼べるような成果であると言えよう。これによって、出版が遅れたために、ヨーロッパ勢にリードを許していたアメリカ学派がいまやそれに追いつき、追い越そうとしている姿を見るのである。

学界の流れから言えば、1960年以降特に注目をあびだしてきた cognitive anthropology とか、emic anthropology, new ethnography, formal ethnography, semantic analysis, componential analysis, kinesics, ethnosciences, ethnolinguistics, ethnosemantics とか種々な名で呼ばれている方法論上の「新しい」傾向から影響を受けている。⁹⁾ 人類学者は対象とする人間集団を直接観察し、その構成員

と十分親密になって必要なインフォメーションを獲得する。対象の人間集団は通常人類学者とは違う価値観、生活様式、行為様式をもっている。これらのデータをいかに獲得し、分析するか、またその結果を人類学者の住む世界の人間にどのように伝えるかが人類学者の主要な(狭義の)方法論といえる。著者は、「一つの文化とは、習慣・文物からなるのではなくて、それらを適用する際の規準や規則からなるのである。それら規準や規則が、文化的に適切な行動を生み・認識し・解釈する為の住民の能力を説明するのである。」(本書185ページ)という立場から、まず土着にある範疇を第1に重視して、その上に著者の分析の網(=西欧的思考法)を巧みにかぶせる。土着の範疇を徹底的に追求していこうとする分析方法は、従来主として親族名称などの言語学的なデータに関して活発に行なわれてきたものであるが、Moerman のように、モノグラフとして、しかも対象領域を「農業」にとって分析したのは初めてであろう。

Moerman 自身が本書を書くにあたっての問題点としているのは、(1)アジアにおける平地稲作農業の(特にその社会的意味の)無視を補うための詳しいデータの提供、(2)「農民」の人類学的概念規定——(peasantness が、自給自足の完結体ではなく、“dependent incompleteness” であるということ)、(3)民族誌の提示の仕方、の3点であり、これに基づいて、各章の構成はだいたい、Technology と Extracommunity Relations の節に分けて提示されている。とにかく、村人がいかに情報を得、どんな種類のデータを手に入れ、それをどのように状況に応じて適用していくか、という(彼の言う)「農業に関するタイ・

7) Thomas M. Frazer, *Rusembilan: A Malay Fishing Village in Southern Thailand*, New York, 1960.

8) なお、これらに関しては、水野浩一「タイの村落研究に関する諸著」アジア・アフリカ文献調査報告第34冊(民族4)1964参照。

9) Stephen A. Tyler, *Cognitive Anthropology*, New York, 1968; Marvin Harris, *The Rise of Anthropological Theory*, London, 1968, chap. 20 参照。ただし、この位置づけの仕方は、本書のデータの取り扱い方に関するものであって、内容に関してはまた別の位置づけも可能であろう。

ルーの文化」を明確に引き出し、それを質問紙法によるデータとか、人類学者の推測・理論とかと混同させないで提示しようという試みは大きく評価されねばならない。

本書の構成

本書は4部からなり、それに付録として、A：もち米，B：数量的データ収集方法，C：タイの他地方との数量的比較，の三つがつき，Lue語のグロッサリー，計量単位などもノートとしてつけられ，文献・索引も整っている。第1部は，背景となる調査地の人と場所および著者の問題意識が述べられている。第2部は農業経営のあり方を，犁耕農業とトラクター農業の2章に分ける。集落からの耕地の遠さ，灌漑の有無によって，六つの耕作地区に分けられているのを，その経営方法から犁耕方式とトラクター方式とに分類して，テクノロジー，コミュニティ外部との関係とをそれぞれ記している。第3部は土地・労働の獲得手段について，土地獲得と労働力動員の仕方の2章があり，とくにこの部では著者の才気が発揮されている。最後の第4部は本書のタイトル同様，選択と変化と題されている。どの農業法を選択するかについての村人の判断規準，外部からの判断，客観的な出費と収益などについて詳しく論じられている。しかし，問題が問題だけに第2部，第3部のように clear-cut な叙述からは程遠い。

最後の章，農業の変化は，1965年再調査の時，予想に反してトラクター農耕が衰退の方向に向かっていたところから，経済発展予測の問題点を土着民の選択・決定モデルにしばって論ずる。なお，2部・3部の最後の要約の中の経済発展論と本章とを続けて読むのも，著者の経済発展に関する考えに興味を持つ者には有効な方法であろう。

Ban Ping 村

ところで，本書の舞台になっている Ban Ping は，チェンライの町から直線距離にし

て約数十キロメートル東南方に当たり，ラオスとの国境のほど近い所に位置している。

村民はすべてタイ・ルー族であり，カーストとかタブーといったような伝統的抑制はほとんど存在していない。彼らの生活態度は勤勉かつ地味であり，豊富にある土地資源の上に水田犁耕農業を志向し，それに専心している。そのため，村人は農業以外に副業を求めようとはしないし，また離村をする人もいない。農具などの生産要素には現金が介入する余地はすくなく，村人の生活も都市や国家依存的不是ではない。

土地が十分にあるために，土地をめぐる争いとか，あつれきはなく，不在地主や農業労働者は存在しない。大部分の者は自作もしくは自小作で，あまり階層分化もみられない。従って，村人の団結心も旺盛であるといわれる。なお，地主，小作関係にしても，中部タイ国とは異なり，前述のように現金は介入せず，物納によって支払いが行なわれている。

Ban Ping の戸数は調査始め114，調査終了時121で，384 ha の土地を耕している。6種類の耕地地区の内，村人は2～3種類くらいの土地を持っていることが多いが，稲の種類の違いなどで収穫期を違わせて労働を調整している。Moerman の分析をたどれば，トラクター耕・直播・うるち米(商品米)・遠い開拓田と，犁耕・移植・もち米(自家用)・近い(相続による)水田との二つに対比され，トラクター耕コンプレックスと犁耕コンプレックスとが Ban Ping の農業体系を形成していると考えられる。

トラクター耕による開墾地では土地の値段が安く，反収も大きく，村人の常食でないうるち米を植えて現金収入を得ている。トラクターを使う開拓田を耕作する者は，冒険的・企業者的であり，家近くの灌漑田を耕すのが保守的・自給的な老人層であるのに対し，若者と中年の世代の者たちである。トラクターそのものは村にないので，町の持主に依存す

る。従って耕作時期などは町の者の都合によって決められる。またトラクター代という現金支出が生じ、その生産性が現金支出に合わないという理由で、トラクター耕は生産性が低いと村人達は思っている。トラクターの未利用地の耕作、労働節約に際する利点は積極的に評価されないわけである。その上トラクターの入る開拓田は、(水害などによって)収穫が不安定、家から遠く離れている、その為に運搬などが不便、他村から来た他処者と会うなどの欠点を持つと村人は考えている。Moerman は、Ban Ping におけるトラクターの導入を、日本の金肥が農業発展に及ぼした影響にたとえて評価している。

ところが、1965年に再調査に行った時は、開拓田でトラクターも直播も用いられていないことが、著者をひどく驚かせている。これは、開拓田の灌漑が十分整えられて、洪水の心配もなくなり(反収の安定化)、耕地も十分整備されたからで、村人としては収量の減少をもたらし、不愉快な現金支出を伴うトラクターをやめて、伝統的な犁耕・移植農法に戻っていったのである。

Moerman のように厳密な分析を志向する者にも、その土着の認識体系を十分理解することがいかに難しいかを立証している。ちなみに、Moerman は反省の意味をも込めて、次のように結論しているのは傾聴に値する。文化的な「変化」とは、決定を何のためにするかという目的と、決定を何によってするかという規準と、決定にあたってどんなことを考慮に入れるかという証拠の種類とにおける変化であって、経済的变化が起こるということは、単にトラクターが導入されてその結果分配体系が変わったというのではなくて、経済的な決定を行なうに際しての「新しい標準」が表面にでてくることである。そして決定を行なう規準や規則の変化ということは、とりもなおさず、人々が自分達の世界を見、査定する仕方の変化にほかならない。

問題点とまとめ

以上のように本書の大筋を眺めてみると、Moerman による Ban Ping の分析はきわめて論理一貫して記述されていることが解る。しかしながら、著者のような才子も記述や分析に多少の問題を残していることはいうまでもない。

こまかい点からあげると、数多く出されている表のかなりが、注に作成の基礎になったデーターの出所とか算出基準が明確に記述されていないために死表になってしまっていることが多い。また 152 ページに示されている「土地、現金、労働、資本投下」などという概念を、通常経済学者があげる「土地、労働、資本」の“修正”概念として使用している根拠が明確でないように思われる。さらに、発展途上国の村落調査ではきわめて困難であることは十分に理解できることではあるけれども、生産費や労働日数の算出方法とか算出基準がいささかあいまいである。

なお、時には記述の荒さも目についた。たとえば、174～5ページの「いろいろな田や農耕方式の平均的反収はしばしば驚くほど差異が存在しない」という記述は、160 ページの表16に見られるような数字とはまったく矛盾している。その極端な場合には、森林の開拓田の 1 rai¹⁰⁾ 当りの平均収量 8 hap¹¹⁾ から、遠方の灌漑田の 27.5 hap と、3.4 倍もの平均収量の差異がある。

また、ある時にはあきらかに筆のすべりと思われるようなミスも発見できる。すなわち、59ページにおいては、タイ・ルー族をあまり神々(phi)を恐れることの無いプラグマティストと理解しておきながら、97ページにおいては神々を恐れながら生活しているように書

10) 著者のセンサスは農家別ではなく、耕地別に
なされている。

11) 1 rai は公式には 0.4 エーカー。1 hap は約40
リットルで、Ban Ping の玄米での重さは約22
kg に相当する。

いている。そのほか 181 ページにおいては、田植作業を収穫作業と同様に「楽しい仕事」としているにもかかわらず、すぐそのあとの 184 ページには田植を耕作と同様に「苦しい仕事」として記述をしている。

本書におけるタイ・ルー族の社会や経済の分析の引合いにしばしば中部地方の農村の資料を出しているけれども、資料の絶対量がすくないので仕方がないだろうが、その多くは印象的なものにすぎないうらみがある。印象的といえば、著者は時々「タイ・ルー族は勤勉かつ節約家」であるというようにきわめて計量しにくい問題を分析の前提において、精密な分析に水をさすきらいがある。なお、同様なことは、第 8 章「農業方式の変化」のかなりの部分にもいえることで残念である。

方法論についても二、三の問題点を感じたので指摘しておこう。たとえば、186 ページにおいて、村人の意志決定が 4 年の間にきわめて多様化し、sophisticate したように書いているが、この短期間にはたしてこのような急激な変化が“保守的”な人間の心に容易に発生したのであるだろうか。真相については著者以外に知る由もないけれども、このような「変化」の背景に、著者自身の変化もなかったであろうか。たとえば、第 1 回の調査ではあまり心の中を著者に述べなかった村人も、4 年後の再会でうちとけて、より素直に情報や資料を提供してくれたことはなかっただろ

うか。またその間に、著者の北タイ語もしくはタイ・ルー語の理解が深まったことはないであろうか。そのために十分得ることのできた情報や資料の一部を“多様化”と見ることはなかったか。いずれにせよ、フィールド・ワーカーが“変化”を扱う時には、自分自身の“変化”についても注意を払う必要がある。

ところで著者は culture とか ethnography というような概念をきわめて特徴的に駆使することによって、本書をたいへん独特なスタイルに作りあげている。たとえば、ethnography をこれまでの「民族誌」とははっきり区別することによって、この本をタイ・ルー族の「エンサイクロペディア」にすることから救っているけれども、同時にその事実にもとづいて、一部においては分析の文脈を理解するのにいささか困難になっている。たとえば、家族なら家族については全体的な記述がない上に、索引も不十分なために、本書を読んでいるうちに、家族構造を知る必要があった時にはその発見が容易ではないのである。

以上、本書の問題点について若干の指摘をおこなったのであるが、これらの存在はけっして本書の価値や著者の人類学者としての水準に疑問をいだかせるものではないのである。

人類学者のみならずそのほかの社会学者、ならびに農業開発に従事する方々にも一読をおすすめする。